

道具の達人、山の世界に恩返し

笹原芳樹さん



山用具のお話ならこの方、その
の温厚な語り口でお馴染みの笹
原芳樹さん。山ヤさんとして、
精鋭クライマーだった時代を
た今、たくさんさんの登山者とい
ろ々な形で関わっていらっし
る笹原さんにお話を伺いました。
(インタビューと文：張晶子)

◆ どんな子ども時代をすごしましたか？

一回旋塔と鉄棒が大好きで、足は速いほうなの
に運動嫌いな子どもでした。良い子でしたよ。
虫が好きで、夏の朝、早起きしてはカブト
ムシを探しに行っていました。前もって櫛の木
に砂糖水を塗ったりして。それで、小学校5
年の時に生物部に入りました。でも先生が植
物専門の先生で、押し花作りとかすること
なっってしまったのですが。
中学でも、高校でも生物部は続けました。
そのままの流れか、大学も林学科に進みまし
た。

◆ 山に入るようになったきっかけは？

小さい頃から父親が高尾山や釣りなどに連れ
ていてくれましたが、山に入ったのは、高
円寺中学の同級生と釣りに行くようになった
のが始まりですね。担任の先生も山好きで、
先生とも山に行きました。奥多摩の沢などに
自然に入って行くようになりました。
高校の時、一人で軍畑の下の川で溺れそう
になったことがあります。その時はフェルト
の地下足袋を履いていて、胴までのゴム長で
はなかつたので足が浮いてしまうことには

ならず、なんとか岸に流れ着きました。でも、あれ以来、トップで泳ぐような沢は怖くて行けませぬ。高校2年の夏には、先輩と行った苗場山で落雷に遭って、テントを張っていて、吹っ飛ばされ、気づいたら倒れていたというこどももあります。雷でも怖い目に遭いました。今も恐怖です。

◆ 転機となった山は？

— 大学に入ったところ、クラスメートに山学同志会のメンバーがいました。山岳部やワンゲルに入るまでもなく、そこからクライミングが始まりました。秋の北鎌尾根に二人で出かけた時、北鎌沢の出会いでテントを張ったところ、やって来た熊に食料の入ったザックを獲られました。最初は一つ、そしてもう一つのザックを狙って、もう一度引き返して来たのです。数頭の熊がそのザックを奪い合う気配は、それはもう恐ろしかったです。残されたテントや装備を抱えて引き返し、湯俣で段ボールとヒモをもらい、背負い子を作って帰りました。これで装備をまた揃えなければならなくなっただけで先輩に紹介されたのがカモシカスポーで始まりました。店に入り浸るうち、アルバイトが始まりました。ある意味人生がこれで決まったようなものです。豊島山岳会に入ったのも北鎌の後です。

◆ 現在に至までの山と、山に関わる活動の関係、思いなど聞かせてください。

— 大学の4年間は、そのクラスメートや山岳会の人と登りまくってしまいましたね。冬の八ヶ岳の氷の壁のバリエーションは、大同心・小同心を始めとして、横岳西壁のルンゼなど、相

当こなしましたね。3年の冬に谷川岳一の倉沢の滝沢リッジに行こうとして、土合駅前のラッセルで敗退して、その足で阿弥陀岳の北西稜に行ったことがあります。登ったところで日没とホワイトアウトで下降路が見つからず頂上でビバークしたりしました。つっぱっていた時代でしたね。

初めての遠征は80年、4年生の時でした。当時ネパールは許可手続きなどが面倒だったので、ペルー・アンデス・チャクララフを選びました。メンバーは5人でしたが、隊長が落石を受けるという事故があり、敗退となりましたが。

83年、新婚旅行の2度目のペルーではピスコに登りました。

86年には冬期(12月)プモリ東稜を、89年2月には韓国のトアンソンの氷壁を、当時日本人としては初のワンプッシュで登攀しました。

92年には、冬期アマダブラムの南西稜を大野さんと登りました。この時は、青田浩さんも南西稜を、山野井泰史さんが西壁を同時に同パーティとしてソロで登ったのです。4人で3ルートという変則的な遠征パーティでした。

12月初旬のネパールなら数日で登れて、休暇もあまり使いませんか。プモリはベースキャンプから3泊4日でした。

◆ 現状の山をめぐる状況について思うことはありますか？

一 道具の進歩はすごいですよね。科学的に改良されて、軽量化が著しく進んでいます。コンパクトにもなっています。でも荷物は軽くなっているのに、道具の進歩とは裏腹に、山の事故は減っていませんし、体力がないのか、元気がないのか、若いアルパインクライマーは一部にとどまっている

ように感じます。山を知りたいという食欲さが感じられないとでも言うのでしょうか。30代に差し加かる頃、自分の好き勝手な山ばかりやっつけてはいけないのではないかと悩み、何か登山界に恩返しのようなものをすべきではないかと考えました。その頃か、都岳連（東京都山岳連盟）や、日山協（日本山岳協会）の研究会など、協力出来るところは協力しようと思いついて来ました。環境問題などは、バラバラな組織を一つにして、ムダな労力は省いて登山界全体でやて行けたら良いの普及など大事なことです。ケータイトセたらどうでしょうね。個人的には、これからは楽しい海外の山に行ってみたいですね。ヨーロッパもヨセミテも、先進国に登山しに行ったことがないので。

- ◆ 誰にでも、厭わず道具のことを一緒に考えてくださる、山の香をたたえた笹原さん。恩返しへの情熱は40代、50代と次第に薄れて来ますよと笑いがらも、山の様々な問題への提案のための引き出しは、お借りしたい。カモシカスポーツにお邪魔させていただき、ありがとうございました。